
蜘蛛

きみよし藪太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蜘蛛

【Zコード】

Z8642S

【作者名】

きみよし敷太

【あらすじ】

蝶姉様は血のつながらない蜘蛛を弟のよつに可愛がる。

ふたりは死人。

娼館の女たちも皆、他のいきものと掛け合わさせた死人だ。

今日も蝶姉様の上客、安坂がやつてくる。

続をものです。

鰯の刺身が食べたいと言われて遣いに出たので、今日は特別な客が来ることを蜘蛛は察していた。蝶は魚など何が楽しくて食べなくてはならないのだといつも言つてゐるくせに、安坂が来る日だけは嬉しそうに彼の好きなその食べ物を用意させる。色が黒く、細いのに肩幅のがつちりした安坂はまだ若いのに蝶の上客で、田鼻立ちがすつきりとして左右対称の丁寧な顔をしているせいなのかその爽やかな性格のせいなのか、人好きのするなかなかのいい男だった。あの少し骨張つた手が、と蜘蛛は思う。持ち方のおかしな箸使いをしながらも、楽しそうに鰯の刺身を食つるのは、見ていのちも愉快な気分になる。酒もよく飲むし他の客もたくさん連れてくる、そして彼らは最初おつかなびっくりであつてもそれなりに見目美しい猫や狐や犬などを抱いて帰るのだから、結局金になる。店にとつてはあれほどの上客も少ないだらう、などと考え方をしていたので、つい魚屋の裏口を通り過ぎてしまいそうになつた。あわてて引き返し、その戸口をそつと叩く。一旦ふつくらとした人の良さそうな女が顔を出したが、すぐに眉を寄せて引っ込み、しばらくしてから赤ら顔の親父が笑みを浮かべて出てきた。

「おう蜘蛛、今日は何の遣いだ」

「……今日は鰯の刺身を、」

「ああ、ちょっと待つてて、今すぐ包んで持つてくるから」

先程の女の態度に今でも傷付いてしまう自分を蜘蛛は恥じる。魚屋の親父は確かに金の為に愛想がいいのかもしれないが、それでも前のようにあからさまに気味悪そうな顔をして追い返すことはなくなつたではないか、と言い訳を並べて納得しようとする。

蜘蛛は死人だ。

若くして死んだ男なのらしい、年の頃十三、四の姿をしており、そばかすの散つた白い顔に細い目、そしてひょろりと長い手脚を持

つていて。身寄りのない死人を引き取るのが、それともどこからか盗んでくるのか家族に売られるのか、蜘蛛のいる娼館ではそういうものに動物を掛け合わせた生き返りの女ばかりがいる。猫に狐に犬に狸、鳥に鼠などほぼ人間と変わりがないが、尻尾があつたり羽があつたりする女達だ。男はすべて見世物小屋へ売られるらしいが、たまたま生き返りの中でも一番美しかった蝶が蜘蛛を弟のように可愛がつており、この子はあたしの付き人だから、と手元に置いてくれているので見世物にならずに済んでいる。自分達を何の目的で誰が作つておるのかは知らないけれど、とにかく一度死んでしまったものを他の命と掛け合わせることによつて再び生かされているようだ、しかしその仕組みは蜘蛛もよく分からぬ。覚えているのは生前の名前くらいのもので、それも誰からか戯れに教え込まれただけだと言わればたちまち自信を失くす。

「ほら持つて行きな、悪くなつちまわないうように今夜の内には食つちまうよ」

しばらく待つているとまた裏口の戸が開き、魚屋の親父が白い包みを手渡してくれた。蜘蛛は礼を言つて深々と頭を下げ、金を払つて踵を返す。聞いちまわなきやそこらの子供と同じなんだけどな、と親父が言つるのは、彼の耳には届かなかつた。

「嫌だ嫌だ、氣味が悪いよ塩でも撒くと良いさ、あんたもまた物好きな人だね、あんな化け物小屋の奴等に魚を売つてやるなんて」

蜘蛛に眉を寄せて見せた女がひょっこり顔を出し、大袈裟に顔を顰めた。

「金払つてくれりや誰だつて密さ、木の葉や貝の金だつてんならお断りだがな。それに蜘蛛も可哀想な子じやねえか、一体いつまで年取らないあの人まで生きてんだか」

「だから化け物つて言うんじやないの」

「人を捕つて食つてもないし、害がなけりやいいとは思うがね」

死人が出歩いているつてのが氣味悪いんじやないの、と女は怒鳴りつけて奥へ引っ込んだが、親父は蜘蛛が行つてしまつた裏道を

なんの気なしに眺めながら、それでも金払う誰かの道楽で生き返つてんなら死人も可哀想じやねえか、とだけ呟いた。

「蜘蛛、蜘蛛はまだ帰つてこないの、」

鈴を振るような声がする。瞬間は静かな娼館へその声は溶けてしまいそうに空気を震わせた。今戻りました、と勝手口で短く叫び、通りかかった狐にくすりと笑われる。

「あんた、またこんな所で大声出すと、蝶の奴に無粋だつて叱られるわよ」

鼻のきゅっと尖つた女はふさふさとそれは見事な尻尾を持つている。細いつり 田をますます細くし、不意に手を伸ばして蜘蛛のざらざらした黒髪をぐいっと撫でた。

「わ、」

「あんた可愛いねえ、食っちゃいたいくらいだよ」

「……狐姉様、蜘蛛をからかわいでください」

小さな声でようやく言つと、狐はますます田を糸にする。

「今日の遣いは何だつたんだい」

「安坂様がいらっしゃるので、鰯の刺身を買つようこと」

「また鰯！ あの男は金を持つてゐるくせに貧乏たらしいものが好きだよ」

蝶姉様に呼ばれていますので、とそそくさと脇を通り過ぎようとしたけれど、狐の尻尾にしばし邪魔をされ、玩具にされてからようやく解放された。蜘蛛は自分がからかいの対象であることは重々承知だが、それも仲間としての異性が他に居ないからなのだとということも知つてゐるので、されるがままになつてしまつ。一度死んでいる身なのだ、所帯を持つことどころか誰かを好いてしまうことも御法度とされている彼女らを、どうして邪険にできるだろ？

「蝶の付き人なんてやめちまつて、狐のものになんなよ！」

ありがとうござります、と俯きながらも笑つて見せると、あらま可愛い顔をして、と相手も嬉しそうに笑つた。蜘蛛は可愛がられて

いるのだ、基本的にはこの娼館で。こゝのやうつ、と豆の入った大福をくれて、狐は一階へ上がって行く。それを見届けてから、蜘蛛は慌てて、けれども足音を立てないよつて蝶の部屋へ行った。

「戻りました、蜘蛛です」

「お入り、」

襖を開け、覗いた蜘蛛の目に飛び込んできたのは、色とりどりの帯の川。虹の配色と同じ、紫に青に藍、緑、黄色、赤に橙、それから金も銀も、溢れる色彩に蜘蛛は眩暈すら覚える。

「蝶姉様、何を、」

「安坂はどの帯が好きだと思うかい」

「今夜の着物ですか」

透き通るよつうな白い肌を持つ蝶は、その名の通り美しい羽を背に隠している。小さな顔に大きな瞳は濡れて輝き、くちづけを受ける為だけに存在しているかのよつうなふつくりとした唇は何人の男を知つてもまだ純粋無垢な印象を与える。

「帯から決めるのですか、着物ではなく、」

「着物で迷つたので帯からにしたのだが、けれどもそうしたら余計に迷つ」

悪戯をしている子供のよつて田を細め、蝶はその形良い唇を持ち上げて微笑む。

「蜘蛛は……蜘蛛は蝶姉様にはどんな着物も似合つと、そして似合わないと思いますが」

「似合つけれど似合わないとは、」

「下手な着物よりも蝶姉様の方が美しいですよ」

「お口が上手くなつたこと、嫌だわ蜘蛛もそつしてあたしをからかうのねえ」

そんな、と慌てて首を振つたところがまた可愛らしさと蝶は笑い、その小さな手で蜘蛛を手招く。帯を踏まぬよつて近付き、蜘蛛はひらつと誘つていた蝶の手に自分の頬を押し当つた。

「こゝの可愛い口があたしをからかうのね、」

小さな掌はそのまま蜘蛛の顔を覆い、蝶の方へと引き寄せる。白粉の香りは甘いのだといつもその時に思う。唇を重ねたことはないのだけれど、見詰め合いつとそれ以上に空気は濃くなり互いの間に何かしらの感情がやり取りされている気になるのだ。

「あたしに『似合つ』だけの着物を安坂に買つてもいいこと……あら、それは、」

ふと蝶の手が蜘蛛の胸元に伸びた。ぎくりとして身体を硬くするも、目的は蜘蛛自身ではなくそこにあつた小さな包みだということがすぐに知れる。

「これは、」

「さつき、狐姉様に頂いた大福で、」

あ、と思う間もなく、その包みは蝶の小さな手で投げつけられた。驚いた蜘蛛が目で追うも、既に包みは壁に叩き付けられてひしゃげ、中身の餡まで飛び出している。余程の力だったのだろう、この小さな身体にどうしてそんな力がと蜘蛛は不思議に思つていた次の瞬間にもう蝶に思いきりの力で抱き締められていた。蜘蛛は驚いてもがいたけれども少しもその腕からは抜け出せない。

「あたしの他から誘惑をされては駄目よ」

「誘惑、など、」

「蜘蛛は可愛いから駄目よ、誰にでも好かれてしまつわ、だから駄目よ、蝶から離れちゃ駄目なのよ」

大福を貰つたくらいで、と正直思わないでもなかつたが、蜘蛛はそれ以上何も言わずに蝶がしたいがままにさせておいた。帯を踏まないようになると氣を足元に集中させているのだけれど、蝶の方はまったくお構いなしだ。

「蜘蛛は蝶の可愛い弟よ、絶対誰にも誘惑なんかされちゃあいけないのよ」

ぎゅうぎゅううと力を込める白い腕の、その隙間からつい笑い声を上げてしまつと、蝶は驚いたように蜘蛛を解き放した。

「なに、」

「本来ならば、蝶は蜘蛛に食べられてしまふものでしょうに」

「まあ、このお口は恐いことまで言つじやない」

解かれた腕からするりと抜け出て、蜘蛛は壁に叩き付けられた大福をそつと拾つた。埃をそつと払い、大福を破つて出てしまつた餡を指に移してぺろりと舐める。

「狐姉様は蝶姉様から蜘蛛を盗ろうなんて思いませんよ、大福だつてほらふたつ、最初から蝶姉様の分と蜘蛛の分だつたのでしょう、美味しく頂かなくては罰が当たります」

「……死人が仏様みたいなことを言つうのね」

「蝶姉様、」

「……嘘よ、蜘蛛が可愛いからからかつただけなのよ、」

色とりどりの帯が流れる、娼館の中で道に面していらない場所の一番広い部屋を蝶が使つてるのは、彼女が一番の稼ぎ手だからだ。色とりどりの帯の川、それは蝶の心のように流れてゆくだけで果てがない。死人なのは蝶もまた同じで、自分の言葉に彼女が傷付いてしまうのを見ることが、蜘蛛には哀しく胸に刺さる。

「……蜘蛛の姉様は蝶姉様だけですよ」

ひしゃげた大福を掌に載せて、茶を入れてきましょうと蜘蛛は言う。

そんなもの食べないわよ、と蝶はむくれたのだけれど、すぐに玉露だつたら考え方改めてあげないこともないと付け足していくと微笑んだのだった。

蜘蛛・2 (前書き)

続やまか。

娼館は、夜の遅い時間に灯を燈す。闇に紛れて客人達はやつてくるのだ、確かに化け物を抱きに行つていると知られては都合の悪いこともあるのだろう。

日が暮れかけ、西の空が淡い橙から濃い赤に変わってゆく頃、女達は化粧を始め、着物を選び出す。簪だの帯だのがないと騒ぐのは大抵のもので、その間蜘蛛はブリキの小さなバケツにぞうきんを入れ、娼館の中を歩きまわるのが常になっていた。動き回つていないと、女達につかまり悪戯に化粧をされたりするからである。玄関口を入つてすぐのところにある大きな階段の手摺りをこすり、唯一人間である、この館を取り締まつている高梁の爺と顔を合わせ、裏口の扉が壊れているようだと言われた。

「上手く開かなくなつていいんだがね」

見てきます、と蜘蛛はバケツを片付けて裏口に回る。取つ手の螺子が馬鹿になつていて、緩くなり過ぎていたのを誰かが手荒に引き回したのだろう、今度は固くなり過ぎて回らなくなつていて。確かにこれでは上手く開かないだろう、と思ったが、生憎それを直す為の道具はあっても肝心の螺子がなかつた。困つたな、と蜘蛛は呟く。暮れ時に開いている店などなく、明日まで放つておいても良いのだけれど時折客の途切れた合間に裏口からそつと出て一服する姉様もいる。戸が開かぬと機嫌を損ねられても困るが、それ以上に癪癪を起こして戸を壊されるのも心配で、仕方なく蜘蛛は金物を取り扱う店まで行くだけ行つてみようかと思つた。

「高梁さん、ちょっと出でます」

「おや、こんな時間から、」

「裏口は螺子がおかしくなつていいのよ」

「店など閉まつていいのよ」

「はい、それでも」

行くだけはだから、と笑つて見せる蜘蛛に、高梁は気をつけて、と声をかけた。

「薄闇は闇より恐いことがあるでね」

大丈夫ですよ、と小銭だけ握り締めて蜘蛛は出て行く。しかし金物屋はやはりきちりと雨戸まで閉められており、仕方がないけれどそれはそれでまた明日、と蜘蛛は帰りを川に沿つた道を選んだ。柳の木がいくつか植えられているその道は、昼間でも少し薄暗く女子供に不評だ。風にそよぐ柳の細い枝は幽霊のように意志を持たず誰彼をも誘うから、それが気味悪いのかも知れない。けれども蜘蛛はその道がなぜか好きだった。湿つたような匂いのするそこを歩くのは、死人である自分にはぴたりだと思つていたせいもあるかもしれない。しかし、それ以上にあまり人が通らないことも彼をまた安心させていた。人が少し、苦手なのだ。

既に酔つているのだろう騒がしい男達が時折通るのを、首をすくめ、蜘蛛は歩みを遅くしてやり過ごす。そうすれば他には人に会わずに済む。それより早く帰つて客用の酒を用意するのを手伝つた方が良いかしら、などと思つていた時だった。後ろから、やけに賑やかな足音が近付いてくるのは気付いていたのだけれど、まさかいきなり伸びてきた手に口を塞がれるとは気配にも気付かなかつた。醉つ払いだらうと高を括つていたせいだらうか。

「なつ、」

いきなりがぱりと大きな手で口を塞がれたせいで、呼吸が乱れる。もがこうとする前に腕を取られ、そのままどう転がされたのか地に伏す形になつた。勢いがよかつたので膝や腰骨を打つたらしい、嫌な痛みがあちこちに走る。

暗闇で痛む身体のあちこちが、いきなり今まで感じもさせなかつた存在感を露わにさせ、死んでいるのに、と蜘蛛はこんな状態なのに一瞬氣を逸らしてしまつた。

「こいつだこいつだ、あの化け物娼館の奴だ」

「おい、でもこれ女か？」

首をきゅっとねじり上げられるように掴まれる。くうつ、と声が漏れたが、男達は氣にも止めずあつという間に胸元へ手を差し込んできた。

「いつ、いやつ、」

少年の形をした蜘蛛の声は変声期前のそれのように少し高い。着物の襟元から突っ込まれた手は容赦なく蜘蛛の薄桃色をした乳首を擦り上げた。

「これじゃ分からん、まだ乳が育つてないのかそれとも男なのか」「細い首をしとるがな、どれ、脱がせてみよつか」「化け物だらう大丈夫なのか」

「大丈夫大丈夫、見世物小屋へ売ればいい金に成るだらう、娼館の者だしどれ、味見でも」

蜘蛛はその名の通り口から糸を纺ぐ事ができる。ベトベトする糸を吹きかけて逃げ出してやることもできたのだが、生憎押さえつけられている為顔を真っ直ぐと男達の方へ向けることができない。

「いやつ、」

騒がれると困る、と先にひとりの男が蜘蛛の口へ手ぬぐいで猿轡を噛ませてしまった。後はただただ空気が漏れるよつなか細い声が抜けるだけである。

「うつ、うつ、」

着物の帯に手をかけられたらすぐに身包み剥がされる。両腕も後ろに縛られ、なんだ男じゃないか、と投げつけられた言葉を地に転がされたまま耳が拾う。恐い、と思った。寒くもないのに肩から震えが走る。薄闇の中だから尚更だらう、輪郭のぼやける男達三人はそれでも爪先で蜘蛛の太股を軽く踏みつけた。

「女みたいな細さだつたのにな」

「まあ男の方が多少の事じや死なないし丈夫だ、ああ、でも高く売れるのは女の方か」

太股を這い上がつてくる足は蜘蛛の陰茎のあたりまで、それは丁寧に這い上がつてくる。ぞぞ、と背中に、先ほどとは違う震えがき

た。くつり、と喉が鳴る、それは逃げ出したいが為の声ではなく。

「……感じているのか」

「なに、お前何をしているんだ」

「いや、こいつなかなか楽しめそうな気がしてね」

「楽しむつて、・・・・・　おい、おつ勃ててやがるのか、もしか

して」「口の中が乾く、それは舌が別の物体のようになり喉に張り付く錯覚を覚える。喉を塞ぐとする悪意を持った塊に思えてくる、自分の身体の一部分のはずなのに。

もがこうと肩をすらして逃げる体勢を取ろうとしてもすぐに一の腕の辺りを掴まれて引き戻される。土の匂いがする。小石が当たるのだろうか、腰の少し上辺りが痛い。仰向けにされている無防備な状態で、男達の顔はよく見えず服従させられている形の蜘蛛はこれから何をされるのかを考え恐くて震えはじめた。殺されることはないだろう、売り飛ばすという話をしていたので。けれども、自分は女のように組み敷かれるのだろうか、そういう趣向を持つ客も時折は娼館へ顔を見せることもあつたけれど、男は蜘蛛しかいないのだし売り物でもなく、当然のように断られてきた。どれ、ひとりの男がしゃがみこんで蜘蛛の顔を覗き込む。酒臭い息だった。

「白い肌だな、でも土で汚れてる」

「いいじゃないか、別に舐めまわす訳もあるまいし」

それもそうだ、と男は大して面白くもないのに大笑いし、蜘蛛はその氣色悪い笑顔を自分に近づけたくなくけれどもがいでどうにかなるのだろうかと半分は観念しかけていた時だった。どこかで聞いたことのあるやわらかに落ち着いた声を耳にしたのは。

「そこの酔っ払いさん方、ちょっとやめておいたらどうでしようかね」

助けなのだと、最初は分からなかつた。仲間が来たのかとすら思つたのだけれど、その声の人は容易に蜘蛛の上に被さりつとしていた男の襟首を掴み、ペいつと投げ捨ててしまつた。

「な、なんだ貴様、」

「あ、将やんじゃないの、駄田じやないこんな所で女の子にオイタ
してぢや、」

「お前、安坂んとこるの、」

安坂、といふ言葉を聞いて、蜘蛛は涙のたまつていた目をおそる
おそる開く。どうやら恐怖にしつかりと瞼を閉じてしまつていたら
しへ。

「おや、女の子じゃないじゃないか、この子は知つてゐ、ああそう、
蝶のところの蜘蛛だ、お前、蜘蛛だね」

これは知り合いだよここでのことは内緒にしてあげるからせつと
とお帰り、と男達を追い返してくれて、安坂は蜘蛛に手を伸ばす。
思わず肌を晒された自分が恥ずかしくて顔を背けてしまつたが、そ
れには気に入った様子もなく、やさしく蜘蛛を起すと着物を直し、土
を払つてくれた。唾まされていた手ぬぐいも取つてくれる。

「あはは、昔母が自分にしてくれたことを人にしてやることがある
うとは。いやいや、さすがに猿轡はなかつたけどなあ」

大丈夫かい蜘蛛、と頬の泥を払つてくれる指先があたたかい。思
わず涙はそのまま零れようとする。

「おやおや、恐かつたんだね、一度お前達のところに行こうと思つ
っていたのだけれど、……少しくらい遅れても良いだろうしね」

「あ、鯵の、安坂様が、お好きな、ので、刺身を、買つて、」

土をある程度払つた後で、安坂は蜘蛛の肩を抱き、震えを認める
とそのまま抱き締める。

「お着物がつ、」

「あははははは、蜘蛛は可愛いな、甘酒でも買つてやひつか、そ
の震えは寒さからか怖さからか、」

「……こわか、つた、」

よしよし、と頭を撫でられて、蜘蛛は安心したよつた緊張したよ
うな。けれども身体のどこかが硬く強ばつてしまつていてのがゆつ
くつと解けていくと感じる。一度認めてしまえば逆に新しい恐怖を

呼んで、自分の身に何が起こりそうだったのかが容易に想像できてしまい、蜘蛛の震えはなかなか止まることがなかつた。

女にほど近い存在であるからといって、自分がこのような日に会おうとは。か弱い者はそれだけで罪なのだろうか、蝶や狐達は毎晩このように男達から組み伏せられているのだろうか。いくら金を貢つているからといって。

そんな事をぼんやり思いながらも、鼻が何かの匂いを拾つていて、美しい女のような匂い、まるで蝶のようだ。

「どうした蜘蛛、まだ恐いか、何がそんなに恐いか」

薄闇で見えんが可愛い唇がきっと青ざめているだろう、とからかうような口調ではあるが、安坂の手は蜘蛛の背をやさしく撫でている。震えは小さくなつて止まらなかつた。先程のことを思い出せば、人に触れられている事に嫌悪を覚え、安坂の身体を突き飛ばしてしまいたい衝動にも駆られるが、鼻先が拾う香りがなぜか蜘蛛の心を慰め穏やかにしていた。

震えが止まり切るまでにどれくらいの時間がかかったのだろう、気が付けばいつの間にか裸足になつていた足が土の冷たさにひどく侵されている。抱き締められた胸のあたたかさがだからこそ痛いほど認識され、恥ずかしい気がして目を上げた。顔を少し持ち上げると、安坂の視線にぶつかる。

「なに、」

「甘い、香りが」

「ああ、それは薔薇だ」

薔薇。

「口を開けて」

「……口、」

それは蝶の為の土産物なのだろう、そう思つたら胸が痛んだ。安坂は蝶の客で、周りが羨ましがるほどすべての安坂は蝶のものであり蝶は安坂のものであり、それは誰から見ても明確なのに。助けてもらつたせいだろうと蜘蛛は思おうとしたけれど、それは無理だつ

たようだ。

「ほら、口を開けて、」

「何故です、」

「いいから、ほら、」

言われたままに開けた口へ滑り込んできたのは甘い香りのするすべらかなもの。

「なに、」

「くちづけをしている気分になるだろう、それが薔薇の花びらだよ、人の舌に一番感触が近いとおれは思っているけれどね、……おや、蜘蛛はそういうえべくちづけをしたことが……」

そういうた行為などした事のない蜘蛛は顔を赤らめて俯き、いいえ、と消え入りそうな小さく震える声で告げる。馬鹿にされるのではないかと思った、そんな大抵の人間が経験済みであろう行為をした事がないなどと言つては、笑われるか、まだお子様なのかと哀れまれるかと思つていたのに、けれども安坂の反応は違つた。それはすまないこととした、と何故か謝る。

「すまない、悪気ではなかつたんだ、どれ、もう一度口を開けてごらん」

軽く唇を開くと、舌に花びらを乗せて出せと言つ。その通りにすると、骨っぽく太いが長さもあるため美しく見える彼の指が、そつとそれを摘み上げた。唾液が糸を引き、蜘蛛は恥ずかしさでまた頬を染める。顔を逸らそうとして、顎を掴まれた。驚いて目が安坂の瞳を覗き込む、彼はゆっくりと笑みの形を唇で作り、ひとつ瞬きをすると蜘蛛へ顔を近づける。

「え、」

重なつてきたのは唇。蜘蛛は目を閉じじることも忘れて安坂のやわらかな舌が口内にすると滑り込んできてしまつのを許していた。後頭部をやさしく撫でられ、その手のあたたかさに安心に似た何かを覚える。甘い匂いがする、安坂の胸は血の通つぬくもりがある。

「戯れは、」

息継ぎの要領で唇を離し、慌てて叫んだけれども本当はもう少し彼の唇を味わっていたかつたと、正直なところ蜘蛛は思っていた。できればもう一度、と望んでしまつ。

「ははは、すまん、蜘蛛があまりにも可愛くて、

しかし安坂は笑い顔を作ると身体を離した。それがひどく、蜘蛛には切ない。

「……蜘蛛をからかうのはよして下せよ、蝶姉様に言つて叱つていただきますよ」

「ああ、それは勘弁、蝶は怒ると恐いでな。お前を一番可愛がつて大切にしているのだから、おれがお前に悪戯したと知つたら一度や二度ぶたれるだけで済むものかどうか」

「お客様をぶつたりはしないでしょう」

「蝶のことだからやりかねん、あいつは可愛いが気性が荒くてな、あんなに綺麗な顔をしておいてから」

薄暗闇でもはつきりと分かる安坂のやさしい微笑みに蜘蛛は胸が痛むのを覚える。嫉妬はどちらに対してなのだろう、安坂なのか蝶なのか。

そうそつ今のがくちづけだからね、と安坂が口を細めたまま言った。しばし呆けて意味を理解するのに時間が掛かった蜘蛛は、すぐに耳まで朱に染める。

「安坂様は意地悪です……」

「ああほら、そんな泣きそうな顔をするな、可愛い顔がもつと可愛くなるではないか、もう一度してしまつぞ」

安坂のからかうような口調にどこか心をときめかせながら、蜘蛛は必死で首を横に振る。娼館へ共に行こうかと言われて、小さく頷いた。手を差し出されて、それをおそるおそる握る。幸せな温度のある安坂の手に、体温を失くした自分の手はどんな感触なのだろうと思しながら、蜘蛛は背の高い安坂を少し見上げ、心持ち寄り添うようにして暗い道を歩き出した。安坂の空いている手には赤い薔薇の花が三本、握りしめられている。

続やまか。

化け物といわれても生き返つて逢いたい人がいたのよ、と狐が話している。毎間の娼館は静かで穏やかな空気が満ちている。昨夜の大騒ぎはどこへ行つてしまつたのかと思うくらいだが、時折悪ふざけの客が割つてしまつたお銚子の破片が残つてしたり、壊してしまつた襖などが夢の残骸として存在しており、すべては現実だったのだと思わせる。破られてしまつた障子を直しながら、蜘蛛は狐達とやわらかな陽射しの午後、彼女の昔の話を聞いていた。

「心中したんだけどねえ、相手だけ生き残つちまつて。そんならさつさと後追うか、わたしに一生涯操立てしてりやいいものを、他の女に搔つ攫われちまつて。情けなくて泣けたね、一緒に死のうつて言つてた男がなんだい、女ならわたしじやなくとも良かつたのかいつて」

狐は機嫌がいいと昔話を始める。その時々で細部が違つてしたりするのだけれどそれは愛嬌というもので、蜘蛛もいちいち口をはさんだりしない。椀に入れた糊を刷毛で掬いながら、静かに障子紙を貼つていた。

「生き返つてやつたさ、馬鹿げたことにそれでもわたしはあいつを愛していたんだ、厭だねえ、どうして一度惚れると長いのかね、あれは女だけなのかい、男もそうなのかい」

「人生一度目でも分かんなうことあるんだね、姉さん」

ふくよかでどこか垢抜けない、それでも田舎臭さが売りなのだと、いう狸が茶々を入れる。彼女は先ほどから団子を三本も食べていて、口の周りにみたらしのたれが付いている。客もだからなのか似たような容姿の男ばかりがついて、色恋の話よりも土産物の饅頭の数のほうが多い。蜘蛛にもよく分けてくれるのだが、蝶には怒られる。狸のように太つたらもうあたしの弟として認めてあげないよ、と。

「つるさいね、菓子ばかり食つてる狸の脳味噌まで胃袋な頭じや分

かんないだろうさ、わたしは蜘蛛に聞いてるんだから、どうなんだ
い、蜘蛛、あんたは一度惚れたら長いのかい」

曖昧に微笑んで首を傾げて見せたけれど、狐は許してくれなかつた。

「ほらほら、蜘蛛、どうなんだい、わたしの男だけが特別だつたのかい、一度好き合つたらそれだけで他の男も女も要らなくなるようにはならないのかね」

「……蜘蛛は、そういうた、好くとか惚れるとかの感情がよく、」

分かりませんから、と言いかけて蜘蛛の手が止まる。思い出していたのは安坂の唇。花の匂いがした、あのあたたかくてやわらかな。「腹でも減つたか、口が重くなつたよ蜘蛛さん」

「あんたじやあるまいし蜘蛛が腹減らして言葉忘れるもんかね、なんだい、なんか楽しい話もあるのかい、蜘蛛」

食べかけの団子を差し出そうとする狐を笑い、狐が細い目をますます細める。鼻が鋭いのか狐はそんなとこばかりをすぐに勘よく当ててしまつ。多くを思い 出して赤面する前に、蜘蛛は慌てて、けれども表面上はわざとゆっくり首を振つた。

「何もないですよ、狐姉様、狸姉様」

「なんだい、楽しい話のひとつも持つていないのか

「蜘蛛はただの雑用ですから」

「なんだいなんだい、つまらない。なにひとつとしてつまらない」

「ああ、姉さん、つまらなくないよ、蝶さんが土産を買つてくるだろう、今日はそれが楽しみだ」

ぴくりと蜘蛛の耳が反応した。蝶。そういえば今朝から蝶の姿を見ていない。いつも気紛れに起きてくる人である上、今日は障子を張り替えたり遣いに出ていたりとばたついていたので顔を見ないことも大して気には留めていなかつたのだけれど。

「……蝶姉様は、まだ寝ているのでは、」

「あれやだ、蜘蛛さん知らなんだのかい、蝶さんは朝の早くから出かけたよ

またあんた朝つぱらからつまみ食いしてたんだろう、と呆れる狐の声も耳に入らず、蜘蛛はただただ狸の顔を見詰めていた。普段出かけたりはしない人なのだ、用事があれば蜘蛛にやらせ、それより何より蜘蛛に声もかけずに出かけるなどということは今まで一度もなかつたのだ。

「……知りません、蝶姉様が朝から……」

「あんたが寝ていたからきつと黙つて出たんだよ、起しちゃ可哀想と思つたんだろ」

狐が珍しく蝶を庇うような言い方をしたが、蜘蛛は心にすとんと穴が開いたような気分になつていた。黙つて、出かけた。蝶が。それだけでも裏切られたような気持ちなのに、狸はそんな蜘蛛に気付かずもつと心を痛めることをさらりと続ける。

「ほら、あの人とだよ、出かけるとか言つていたよ、ほらほら、あの金持ちでなかなかいい男の、あれあれ、ほら、そうそう、安坂、あの人とだよ、いいねえ私もあんな上客欲しいねえ」

「安坂様と……、」

「新しい着物も新しい帯も、欲しいとねだればすぐ買つてくれる、しかもあんないい男だもの羨ましいねえ、まったく」

「安坂様……」

ふたりが共にいるのは構わない、安坂は蝶の客であり、互いが互いを気に入つてているのだから。けれどもこの置いていかれたような心細さはなんだろう、今まで知ることのなかつた感情、それを蜘蛛は安坂に感じてているのか蝶に感じてているのか自分でも分からぬまま混乱する。

「そういえば蝶さんの部屋の良い匂いがするあの花、あれ何だい、牡丹の小さいようなやつさ、八重の桜の大きいようなやつ、強い匂いだね」

「薔薇とかいう花らしいよ、真つ赤な花だらう、安坂が持つてきたんだと。可愛がられているねえ、あんな珍しいもの、幾らくらいするんだろうか」

わたしの男もそのくらいわたしの事可愛がってくれてたらねえ、と狐が切ない表情を作る。団子を食べていた指をペロリと舐めて、狸は次の串に手を伸ばそうとしている。穏やかな日の光はあたたかく、それなのに心が寒い気になっているのは蜘蛛だけで、端から見れば楽しそうな団欒風景なのだった。

「あれあんた、暗い顔をするでないよ

「……え、」

刷毛で糊を何度も練るように混ぜる。空気の粒が入り、悪戯に白く濁つてゆくのを、ぼんやりと眺めている、いつの間に動いてきたのか狐につるりと頬を撫でられた。

「蝶に置いていかれたくらいで」

「そういつた訳では……」

暗い顔などしていませんよ、と無理に笑ってはみたけれど、狐は納得しない顔でもう一度蜘蛛の顔をつるりと撫でただけだった。

置いて行かれたと。

口に出され頭に直接刻まれると、深い痛みが胸を刺すようだ。

『それはあたしの弟だから、見世物小屋になんか売つてご覧、二度と客なんか取らないからね』

蜘蛛が生き返ったのはどれくらい遠い昔の話だつただろう。普通は動物と掛け合わされるのだが、珍しく昆虫と掛け合わされた蜘蛛を見に、同じ身体を持つ蝶が興味を持ち覗きに来て、見世物小屋にやられるのだと知った途端にそう叫んだのだった。当時から売り上げの良かつた蝶の二度と働かないといつ宣言は周りを困らせたらしく、蜘蛛は蝶の元に預けられたのだ。弟なのだから、と言われたので、蜘蛛はずつと蝶の元に居た。いつでも一緒だった。それなのに。

「蝶姉様は蜘蛛より安坂様がお好きですから

自嘲気味にそう言つけれど、狐や狸がそれを否定してくれればいいと、心の隅で本当は思つていた。けれども彼女達は否定しない。それどころか、そう言えば、などと言い出す。

「蝶とはもう長い間ここで一緒だけれど、安坂ほど執着されてる男

「ああそうだね、蝶さんは特定の客に固執することない人だったも

も今まで居なかつたね」「んね

蜘蛛もそれは知つてゐる。今までどんなに金を積まれようが口説かれようが、特定の客と出かけるなどといふことは絶対になかつたのだ。蜘蛛に馬鹿にしたような口調で客の悪口を言つのが常だつた、金で動く女だと思っているのかだとか、見かけはこんなでも本当はあの男よりずっと長く生きているのに馬鹿だねえだとか

「蜘蛛は蝶が好きかい」

狐が優しさなのか意地悪なのか判別しにぐい光を瞳に宿してそう聞いた。蜘蛛は静かにひとつ頷く。

「本当に好きなのかい」

「それはどういった意味で……」

聞きかけた時に高梁がやつてきたらしく、玄関先で蜘蛛の名が呼ばれた。短く大きな返事をして、蜘蛛は躊躇いがちに刷毛を持つ手を膝へ下ろす。

「行つておいで、糊が乾かないよう時折水はかけておいてあげるから」

「お願ひします、」

糊の器へ刷毛を置いて、蜘蛛は立ち上がる。蝶のいない娼館はそれを意識しただけでべつたりと重苦しいような、それでいてどこかいつもより多めに空気が肺へ入つてくるような、そんな気分にさせられる。

自分の身体に違う生き物が入り込んで生命を維持されているのだと知り、さらにそれは化け物として生き返つたのだという事、余程の事がない限り死ぬ事はないのだと知つた時、蜘蛛は娼館を逃げ出そうとした。遠い昔の話だ。蝶は我僕な自分を隠そうともせずにいたけれど、それでも蜘蛛の面倒だけはよく見ていたのでそれはそれはひどい怒り様だった。

「逃げ出して何になるところの、どこへ行くところの、もうあんたはあんたじゃあなくなっているのよ、蜘蛛と死人の掛け合わせなどと皆に知れてご覧、売り飛ばされるだけだよ見世物小屋に、ろくなもの食べさせてもらえないままいろいろんな処へ連れて行かれて、いつも疲れて、そんなんだよ、あんたはここに居ればいいんだよ、蝶の弟であればいいんだ」

「類を打たれたのはそれが初めてで終いだつた。

我僕だけれど稼ぎは良く、金が絡まないと人付き合いが上手くできない蝶には、蜘蛛だけが何故か心を許せる唯一だつたらしい。聞けば似たような年で別れた弟がいたそうだ、蜘蛛に自分の弟を重ねていたのだろう。

夜遅くになつて帰つてきた蝶は、安坂を同伴させていたため誰の文句も受けなかつた。機嫌良く酔つている安坂は始終笑顔のままで、迎えに出た蜘蛛の類にまで唇を押し付けようとしたし、蝶に睨まれていた。座敷を用意し、着替えを手伝うために蜘蛛は蝶へついてゆく。

「どこへお出掛けだつたのですか」

思わず険のある声が出て、蜘蛛は自分の声色に驚く。しかし蝶は艶やかに微笑み、黒目がちな眼で蜘蛛をちらりと眺めると、飴玉買つてきたよ、とだけ言つた。

「……蝶姉様、」

「着物も帯も、新しい簪も買つて貰つた、安坂はいいねえ、蝶が欲しい」と言つ物すべて、目に映るのすべて蝶の物にしてくれようとする

「」

「蜘蛛は蝶姉様が出掛けたのを知りませんでした」

「蜘蛛は遣いに出ていたのだもの、あたしだつて出掛けるとは思つていなかつたのよ、安坂が迎えにきたのよ約束があつたわけじゃあなく」

「安坂はいいねえ、ともづ一度だけ繰り返す。

「安坂は蝶が一等好きだと。そんなことを言われて嬉しいと思つたのは安坂が初めてだ、なあ、蜘蛛」

「……の方はお客様です」

「それはそうだ、蝶に金をあんなに使つてくれる、若いのに、なあ。蜘蛛も知らないだろう、蝶があんなにひとりの男を良いと言つのは」「駄目ですよ、安坂様はお客様です」

怖い声を出すなどしたのだ、と蝶がきよとんとした顔をして聞いてきた。置いて行かれて寂しかったのか、とからかいを含んだ声で言われる。違いますよ、と即座に否定して、けれど蜘蛛は俯いてしまう。その通りだからだ、今まで何をするにも一緒だつた蝶から、少しずつ心惹かれ始めていた安坂から、置いて行かれてしまった自分が悲しかつたからだ。

「そういうえば蜘蛛、この前お前怖い目に遭つたというではないか」「……え、」

「安坂から聞いた、宵の道を歩いていて男達に囲まれたと言つではないか、どうしてそれを蝶に言わなかつたのだ」

「それは……、あの……」

男である自分が男に囲まれたなど、どうして誰かに言えようものか。蜘蛛は下唇を噛んで、くつ、と顔を伏せる。蝶などには特に言えない、馬鹿にされることはなくとも、自分が弱い者なのだと晒すのは恥だった。

「安坂から聞いて驚いた、無事で良かつたけれど、蜘蛛に何があつたらあたしはどうすればいいのか分からなくなるよ」

「どうせ死にません、それに蜘蛛に何かあつても蝶姉様には安坂様がいらっしゃいますでしょ」「う」

「……なんだ蜘蛛、お前妬いているのか」「何にですか」

即座に聞き返したのはその通りだからなのだつた。蜘蛛は自分が子供のようだと悲しくなる。誰に対してものは分からなくとも、とにかく自分が妬いているのはよく分かっているのだ、そしてそれをどうしていいのか蜘蛛自身には分からない。

「今度はちゃんと出掛けるのなら蜘蛛に言つ。それで良いだろう、

さて、酒持つて安坂ん所へ行こうかね」

からりと笑つて蝶は蜘蛛に手伝わせて締めた帯をまんと叩く。美しい赤色をしたそれはいつかの薔薇の花びらのようだ。くちづけを思い出して蜘蛛は唇にそつと指先で触れてみた。安坂の唇は、少なくとも今夜だけは蝶のものになることを考えながら。

蜘蛛・4（前書き）

あひなみつと続やせた。

薔薇が匂う。蝶の部屋からだ、それは安坂が来る夜の度に増えてゆく。

鰯の刺身を買いに行かされたことが増えた。

確かに蝶はどこへ行くにも蜘蛛に告げてから出掛けようにはなつたが、やけに頻繁に安坂と外へ出るようになつた。ずっと夜の中でしか生きてこなかつたので、時折彼女は体調を崩して帰つてくる。日の光に当たり過ぎているのだ、死人が太陽の下に居ること自体が間違つている気もしたけれど、蜘蛛は何も言えなかつた。今日も具合を悪くして帰つてきて、床に就いている。冷たい水で絞つた手拭いを額に乗せ、目覚めたら薬を飲ませようと蜘蛛は湯を冷ましていた。どうせはしゃいで歩き過ぎたのだ。自分が人ではないのを忘れ、日の光を浴び過ぎたのだ。蝶の頬に触れると、思つていた以上に熱かつた。ひどい病気ではなくただの熱だといいのだけれど、と蜘蛛は蝶の額の手拭いをまた水に晒す。

今夜は座敷に出られないだろう。安坂が今夜の分も金を出すとしても、蜘蛛は腑に落ちない気分になる。近頃ますますべつたりなのだ、そのことが蜘蛛を苛立たせる。

「……安坂、」

手拭いを額へ乗せようとしたところで、蝶がうつすらと目を開けた。その唇から零れた名が自分のものではなかつたことへの動搖を隠し、蜘蛛は静かに蝶の耳へ顔を寄せる。

「蝶姉様、お加減は」

「……蜘蛛か、安坂はどこへ、」

「座敷で狐姉様達がお相手をしているかと、」

狐姉様、の名で蝶はがばりと起き上がる。熱を持っていたせいで紅色をしていた顔が、音もなく真っ白になつた。

「急に起き上がられては」

慌てて手を差し伸べるが、蝶はそれを振り払つ。

「あたし以外に安坂の相手をさせるなどと」

「蝶姉様」

「安坂は」

「その前にお薬を、」

「つむさい、もう治つた」

「そんな、子供のようなことを、」

安坂、と蝶が大きな声を出す。まるで蜘蛛が苛めでもしているかのようだ。

「蝶姉様、」

「安坂を、安坂を呼んで、」

「の方はお客様です、蝶姉様、どうしての方ばかりに固執されるのですか」

好いているからよ、ときっぱりした声で蝶がそれに答えた。今まで誰に対しても使われなかつたその言葉が、蜘蛛に突き刺さる。

「あたしが安坂を好いているからよ」

「それは一時の戯れでは」

「違う、安坂も言つてくれている、なあ、あたしが安坂と夫婦になるといつたら可笑しいか」

「蝶姉様、それは許されません」

「どうしてだ、あたしが化け物だからか、死人であるからか、それでも安坂は良いと言つうぞ」

「熱があるので、どうか静かに寝ていていらして下せしませ、ほら、お顔が真っ白に、」

安坂、と蝶が切なげに熱のある声で彼の名を呼ぶ。蜘蛛などまるでそこには存在しないかのように。蜘蛛など、あんなに弟として可愛がつた者すら田に入らないかのようだ。

「蝶姉様……」

騒いでいたので声が届いてしまつたのだろう、襖が突然開かれ、ひょっこりと安坂が顔を覗かせた。廊下を歩く音など聞えなかつた

のに、と蜘蛛が首を傾げるより前に、蝶が入つて来た安坂に飛びついた。

「安坂、」

「なんとまあ騒がしい子だらうね、蝶は。ほら、蜘蛛が驚いて目を丸くしているよ、ほら、ほら、少し待ちなさい、いい子だから」

「あたし以外の座敷を取るな、狐と遊ぶな、蝶だけ見ていれば良いのだ安坂は」

「まるで駄々つ子だ、おや、身体が熱いじゃないか、お医者様を呼ぼうか」

「厭だ、安坂が居れば良い、ここに居れば良い」

いやいやと首を振る度に呼吸が荒くなる。蝶の熱がせりに上がりはじめているのは誰の目からも確かに、安坂は軽く蜘蛛へ向つて肩を竦めてみせた。

「いつもこんなだったかな」

「いいえ、……いいえ、熱のせいかと」

そうだなあ、と安坂は蝶を抱き付かせたままやわらかく笑い、では傍に居るから蝶は寝ていなさい、と彼女を促す。

「本当、本当に傍に居るのだな」

「居る、約束する、大丈夫」

すると大人しく蒲団へ戻り、蝶は白く小さな手だけをそつと出した。

「手を」

「はいはい」

安坂が枕元へ座り込み、その手を握り締めてやるとようやく安心したように蝶は目を閉じる。すみません、とその隣で蜘蛛が頭を下げた。いや、と安坂が首を振りまた目を細める。

「この可愛らしい人はどうしてこうなのかね」

返事に困り蜘蛛が黙つていると、安坂はさして気にした様子もなくただ空いている方の手で蝶の髪を撫でた。蝶はもう寝息を立てはじめている。本当は起き上がるのも辛かつたのかもしない。

「おれは蝶が可愛くて仕方ないよ」

「はい、」

「『』から攫い出したいんだよ」

「……え、」

それ以上は何も言わず、安坂は愛しげに蝶の髪を撫で続けるだけだった。蝶は胸の深い場所から何とも形容し難い、泥のように重たいものが膨れ上がるのを感じる。求め合つても、どれだけ同じ強さで求め合つても惹かれあつても、所詮は人間と昔人間だった者だ。安坂よりずつと長く蝶は生きるだろう、年を取り皺も増え、死に近づきながら生きているような状態に安坂がなる頃でも、蝶は今ま何ひとつとして変わらず艶やかに微笑み続けているだろう。それでは駄目なのだ、今は良くとも、その時駄目になつてしまうのだ。先のことばかり心配して動かない今までいたら意味がないと蝶なら言うだろ？ けれども、このまま居ればずつとこのまま平穏な日々が続く、それだけは分かつているのだから、どうなるか分からない場所へ出て行くことはないと思つのだ。

いや、と蜘蛛は首を振る。

それは詭弁だ、本当は自分が置いて行かれたくないだけなのだ。蝶からも、安坂からも。ここにひとりにされるのが厭なのだ、蝶に対する好意と安坂に対する好意が別の種の物であると知つても。「……蜘蛛がもしも、もしも望んだのなら、安坂様は蜘蛛を抱いてくれますでしょうか？」

唐突な問いかけは、蜘蛛の中にずっとあつたものだつた。安坂が驚いた顔になる。ここで自分の望む返答をしてくれたなら、と蜘蛛は胸の内で祈つていた。ただひとつ、頷いてくれさえすれば。

「恐い目に逢つたばかりなのだから、『冗談でもいけないよ、そんなことを言つもんじやない』

もう元の笑みを戻して安坂がやわらかに言つ。

はぐらかされたのだと、蜘蛛は頬を染めた。安坂を蝶と半分ずつにする事ができたのなら、もしくは蝶を安坂と半分ずつにする事が

できたのなら、置いて行かれずとも済むような気がしていた蜘蛛は、それを否定された気分になつていった。

「……そうですね、つまらない戯言でした、」

蝶姉様が起きたら飲ませますので、と蜘蛛は湯を取りに行くと立ち上がつた。

「安坂様にも何かお飲み物を、」

顔を見ないよにして襖を開ける。背を突かれたように部屋を飛び出し、蜘蛛は後手に襖を閉めた。

このままひとりで取り残されるのではないかと、蜘蛛は怖くなつて、いた。ひとりになること自体は怖くない、ここには狐も狸も高梁も、皆気心の知れた者達がいるのだから。

けれども、蝶と安坂から置いていかれるのはどうしても厭なのだつた。

蜘蛛は考える、どうしたら三人で居られるのかを。もしかしたら自分だけが邪魔者なのではないか、ふたりにとつて自分が何もしないことがただそれだけで幸せなのではないかとは気づかない振りをしながら。三人で居たいのは蜘蛛だけなのだ、それでも。

「厭だ……」

置いて行かれてしまうのは。どうすればいいのかと、蜘蛛はずつと想えていた。三人で、ずっと一緒に居られるように。蜘蛛を置いて、ふたりがふたりだけでどこまでも好き合つてしまわないように。

夫婦になろうと、と蝶が幸せそうな弾む声で告げたのは、よく晴れた日の午後だつた。買って貰つたという新しい帯を広げた脇で、珍しく茶を飲みたいと蝶が自分から言い出した。

「饅頭も食べたい」

「珍しい、蝶姉様がそんな事を言い出すと空模様が荒れます」熱を出し、蜘蛛と安坂に迷惑をかけた日のことを、蝶はあまり良く覚えていなかつたようだ。結局風邪を引いていて、その後しばら

く寝込んだ。病氣の時の蝶は大人しく、起き上がっても果物を食べるのが精一杯で、細い身体が益々薄くなつてしまつてはいたけれども、それでも熱が下がり、見舞いに来る安坂とも話ができるようになつてくると、楽しそうに一日よく笑つていたりした。

熱も下がり調子が戻ってきたその日は特に機嫌が良く、口調も穏やかで肌の色も美しい薄桃色をしていた。

「安坂が、ここを出ようと」

「……え、」

「蝶を嫁にしてくれるんだと、なあ、どうじよつ蜘蛛」

茶をいれ、戻ってきた蜘蛛に蝶は嬉しそうに口を開いた。蜘蛛の持つていた盆が揺れる。

「ああ、茶が零れる、蜘蛛、どうしたんだい」

「安坂様が……」

「うん、ああ、蝶にそう言つた、蝶は安坂が大好きだ、なあ、蝶が人の嫁になると」

どうしようなあ、とまた繰り返すも、それは祝つて欲しい心が戸惑つたように言わせているだけなのがすぐに分かる。真つ赤な唇が幸せそうに笑みの形を作つている。

「……無理です、蝶姉様、」

「なに、何が言つたかい、蜘蛛」

盆から自分で湯飲みを取り、蝶はぺたりと座り込んで微笑んでいる。饅頭食べたら狸みたいになるだろうかと、自分で言つて笑う。声は届かず、蜘蛛は無視された気になつた、それは彼をひどく憤らせた。

「蝶姉様は蜘蛛を捨てるのですか」

「……どうした、蜘蛛を捨てるとは……そんなことはないだりう、蜘蛛はここに居る場所があるではないか、どうした蜘蛛、そんな怖い顔を、」

「安坂様は蜘蛛にもくちづけました、蜘蛛にも可愛いと、」

叫んだのに蝶はふわりと笑つただけだつた。春の花が日差しの中

でやわらかく花びらをほどいてゆくよつ。

「安坂に蝶を取られるのが寂しいのか」

「違つつ、」

上手く言えない自分にも腹を立て、首を振る蜘蛛へ蝶は手を伸ばす。何を、と田だけで蝶を捉えたが、予想外の動きにそのまま蜘蛛は止まつてしまつた。押さえられたのは手首、重ねられたのは甘い香りのする唇。

「ほうら、これで一緒、」

か、と頭に血が上つた。馬鹿にされていふよつに気がした、あしらい易い子供だと思われてゐるのだと。蜘蛛は怒りに任せて本能を爆発させていた。獲物を捕らえる虫のよつ。『蝶』が『蜘蛛』に捕食されるのは自然の通りなのだ。

「蜘蛛、」

蝶の驚いた声があがる。

蜘蛛は耳を貸さず、糸を吐いた。蝶の前では、いや、誰かの前では絶対にしたことがなかつた行為だつた、化け物だと自ら認めることになる上、元々糸を吐くことになる事態がなかつたからだ。

足場用の糸ではない獲物を捕らえるための糸が粘り気を持ち蝶に襲い掛かる。悲鳴をあげて逃げ出そうとする蝶は、けれどもまだ最後まで蜘蛛の戯れなのだと信じてゐる光を瞳に宿していた。

「蜘蛛、」

白い糸で蝶の身体が着物ごとぐるりと囲われる。まるで蛹に戻つてしまつたかのように。首から上だけが糸を絡めずにより、蜘蛛は蝶の唇を手で覆うと耳元で囁いた。

「蜘蛛はずつと蝶姉様と一緒にいいのです、」

首筋に唇を這わせる。牙をむく。

蝶が慌てて蜘蛛の指を噛んだが、蜘蛛はその痛みを少しも感じなかつた。そのまま蝶の首へと牙を立てる。

「きい、」

悲鳴なのか叫びなのか、分からぬ声をひとつ立てると蝶は田を

見開いた。口の中へ溢れてくる血に、蜘蛛はむせ返りそうになりながらもそれを甘いと感じる。

花の匂いがする。

薔薇の花の匂いだ。

安坂が蝶へ贈つたあの赤い花、蝶の血はあの花びらに良く似ているのだろうか。

どれぐらい蝶の血を啜つっていたのだろう、ふと手の中の蝶が軽くなるのを感じて、蜘蛛は口を離す。血が、胸元をべつたりと染め、零れていたのだろうそれは置をも染めて甘い香りを放つていた。

「蝶姉様はもう蜘蛛の中……」

真っ赤に濡れた唇で蜘蛛が笑む。ビニカその顔は蝶を思わせる。

「蝶姉様はもう……」

唄うように繰り返し、蜘蛛はふわりと笑い続けた。

口差しはまだ明るく、部屋の中を、血で染まる蝶だつたものも蜘蛛も、すべてをやわらかく包み込んでいる。

蜘蛛・5（前書き）

蜘蛛、これで最終話です。
お付き合いいただき、ありがとうございました。

白粉を叩く、首筋までしつかりと。紅を引く、真つ赤な花のよう

に。

着付けは分かつていた、何度も蝶のそれを手伝つたのだから。

廊下をぱたぱたと歩きまわる音がする、日が暮れたのでそろそろ女達は夜の支度に入り始めるのだ。着る物を用意したり、あるいは飯を済ませたり。髪を梳いたり、湯を浴びたり。どこかで蜘蛛を呼ぶ声がしたが、蜘蛛は耳を貸さずに紅筆で紅を掬っていた。髪が短いのは仕方がないが、化粧をすれば蜘蛛の細い目も薄い唇もそれはそれで逆に元が無いため妙に色っぽく変化する。蝶の血を啜つたせいなのか、今までとは違つ、艶やかな空気を纏い、蜘蛛は鏡の前に膝を崩して座つていた。

田の出でいる頃までは蝶だつた、今では蜘蛛の糸にぐるぐると巻き付けられている死体は蒲団で巻き込んで押し入れに詰め込んである。いくら紅を引いても上手くいかないような気がして、蜘蛛はそもそも何度も塗り直す。

「これでは違う……」

鏡に映る自分の顔が蝶のそれに重なる。蝶の唇はもつとぱつてりと厚く、誰をもが誘われてしまうそんな顔だったのに。

「上手くいかない……」

ひとつため息を吐き、蜘蛛は前髪をかきあげた。やわらかく細い髪が指先に絡まる。

「これでは安坂様を……」

口にした名にゆるりとひとりで首を振つた。蝶ほどでなくとも良い、けれども美しくならなくてはならない。

蜘蛛、蜘蛛はどこだい、とまた声がする。狐の声だつた、また口でも壊れたのかもしれない、猫が研ぎたいと柱に爪を立てたのかかもしれない。蜘蛛は返事をしなかつた。ここにいるのは蜘蛛であり、

蜘蛛でないもの。蜘蛛にもそれがよく分かつていて、もう自分が自分ではないのだと。

蝶を、殺した。

時間をかけて瞬きをしながら、蜘蛛は鏡の中の自分へ目をやる。蝶を殺した、蜘蛛は『蜘蛛』として、蝶を『蝶』として捕食した。「いいえ、ひとりにはさせません、蝶姉様、」

胃の辺りをそっと押さえる、蜘蛛の手はいつもより妙に白い。鰯の刺身を買っておいで、と鏡に向かつて言つてみた。

「『安坂が好きと、ほら、買って置いてくれないかい』」

蝶の口調を真似ると驚くほど似ていた。もうふたりでひとりなのだ。蜘蛛は着物の袖で唇の端を押さえると、くくく、と笑う。

「蝶、」

部屋の外で声がした。

「……『なにさ』」

「蜘蛛を知らないかい、」

「『知らないよ、また誰かの遣いでどこかへ出でいるんじゃないのかい』」

「出掛けてるんじゃないけれど、蝶、あんた声がおかしいのか」

「『……この前の熱のせいだよ、まだ治らない』」

「……蜘蛛、蜘蛛だらう。あんたわたしをからかつて遊んでいるね、その声は蜘蛛だらう、ちょっと、ここ開けるよ」

「『開けるな、』」

「なに遊んでいるんだい、蜘蛛、蝶は」

「開けないで、」

慌てて言つたけれども戯れだと思つてゐる狐は何の悪気もなく襖を開けた。銀の刺繡の牡丹の花。

「……蜘蛛、」

狐の細い目が驚きに見開かれる。

「何をしているんだい……」

狐の目に入つたのは、白粉で真つ白な顔になり、唇だけがやたら

と赤く染まつてゐる、蝶の着物を身に着けて鏡台の前で座り込んでいる蜘蛛の姿だつた。その顔の異様さに狐は目を疑つ。あの穢やかな幼さの残る蜘蛛の顔ではない。幾人もの男を知つた蝶の顔、まるでそちらの方に良く似ていた。

「蝶は……」

「開けては駄目と言つたのに、狐姉様」

蝶の簪を指先で弄びながら、蜘蛛がゆつくり狐の方を向く。狐は部屋の中に漂う、生臭いような鉄鎧のような匂いに眉を寄せていた。ふと、目が部屋の中央ら辺で止まる。何かを零したような染み、黒に近い赤の、乾いた形容しにくい色。

「蜘蛛、蝶は……」

「そうだ、狐姉様は蜘蛛に何の用かい」

口調がまるきり蝶で、狐は寄せた眉をますます寄せ。背に厭な感触がぞわりと走つた。

「蝶は、」

「狐姉様、姉様は蜘蛛を探してはいたのでは」

「ああ、ああ、蝶の姿がなくてね、あんたなら知つてゐるかと……。安坂から遣いが来て、蝶と会うはずだったのに姿を見せなかつたと」

「安坂様が」

「……蜘蛛、それはなんの悪戯だい」

「悪戯」

何のことでしょうと蜘蛛が首を傾げる。唇は微笑んだまま、それは人形のように張り付いた笑みで狐は蜘蛛から目が離せなくなつた。視界に入れたくないのに、恐怖が興味となり引き付けられてしまつ。

「あんた、蝶を知らないかい、」

「蝶姉様ならほら、ここに」

蜘蛛が自分の腹を撫でる。先ほどよりますます目を見開いて、狐が短く声をあげた。戯れなのだと笑えなかつた、蜘蛛のうつとりと細められた目は狂つたように光を持ち、けれどもけして嘘は混じつ

ていないと知れたからだ。

「蜘蛛……」

「安坂様も食つてあげるの、蜘蛛はやさしいでしょ、これで三人一緒に幸せになれるでしょ」「う

「あんた……」

「これで蜘蛛は置いていかれないですむじや はないの、良かつた、本当に良かつた」

「蝶を……殺したのかい、」

知らず知らずに身体から力が抜けていたらしい。狐はへたりとその場に座り 込んでしまった。蜘蛛が、あの可愛かつた蜘蛛が。

「あんた、それでは本物の化け物だよ……」

「化け物、死人ではあるのは狐姉様も同じでしょ」「う

にこりと微笑み続ける蜘蛛の、真っ白な顔がよく知つたものなのにまつたく知らないもののように見えてそれが怖い。

「ねえ、狐姉様、蜘蛛は可愛いだろうか」

「なにを、」

「蝶姉様と同じほど、安坂様は蜘蛛を愛してくれるだろうか」「うふふ、うふふふふ、と蜘蛛が笑う。壊れてしまつた者の目を

ていた、それが狐をひどく怯えさせた。しかしどうにか襖を掴んで起き上がり、狐は一步、蜘蛛の方へ近付く。

「蜘蛛、」

手を差し伸べると、蜘蛛は無邪気な顔で狐を見る。抱き締めれば元の蜘蛛に戻るのではないかと思われるほどの無垢な顔で。恐々伸ばした指先で、つるりと蜘蛛の頬を撫でた。

「蜘蛛、お前が今日から蝶の代わりになるかい、」

「蝶姉様の代わりなどおりませんでしょ、蜘蛛の望みはそんなものではない、蜘蛛は安坂様の血を啜りたい」

「何故、」

「そうすればこの身体の中で三人一緒に居られます、そうでしょ、それが一番幸せでしょ」「う

「……それは駄目だ、蜘蛛、そんな事を繰り返して」」覧、お前は本物の化け物になるよ」

ぱし、と狐の手が払い除けられる。痛みに驚いて小さく狐は声をあげた。蜘蛛の眉が、き、と釣り上がる。本能で尻尾が膨らんだ。敵意を感じる、危険を感じる、狐の背がぞわりと逆毛立つ。

「蜘蛛つ、」

「いけないのは蝶姉様と安坂様だ、蜘蛛を置いて行こうとした、「零れたのは涙。

ゆるゆると瞳を揺らし、大粒のそれは蜘蛛の頬を濡らす。涙を零したのにも気付かない様子で、蜘蛛は狐を振り払った。

「駄目だ、蜘蛛、駄目だ、」

部屋を出て行こうとする蜘蛛の足に縋り付き、狐が叫ぶ。

「駄目、誰か、誰か蜘蛛を止めて、誰か、」

既に時間となつていたらしい、ちらほらと見える客達が何事かと顔を出し、女達も狐の切羽詰つた声に驚いて声を出し合つ。

「安坂が来る前に蜘蛛を止めて、」

「離せ、離せえ、蝶姉様、その手を、」

ずるり、と引きずられて蜘蛛が畳の上へ転げる。空いている足で狐の手といわず肩といわずを蹴つたが、狐の力は思つて以上に強かつた。それでも。

「おや、今日はなにやら賑やかしいな、」

階下で蜘蛛の待ち望んでいた声がしてしまつた。安坂だ、と狐が絶望のため息を漏らす。

「安坂様、」

蜘蛛に信じられない力が漲つたのは、その声のせいだつた。狐を振りほどき、転げるよう蜘蛛は階段まで来ると駆け下りるのももどかしく飛び降りる。

「逃げて、逃げて安坂、」

狐が渾身の声を振り絞つて叫んだ。蜘蛛はうつとりとした表情で安坂まで駆け寄ろうとする。

「安坂様、」

愛しています、と続いた気がしたが、それは誰の耳に届いたのかまるで分からなかつた。蝶姉様と安坂様と蜘蛛と。これでもう離れなくて済むのだと、蜘蛛は誰に対しても嫉妬をしなくて済むのだとどこか自分で安心していた。

「逃げて、安坂、蜘蛛から離れて、」

狐の祈るような叫びももう届かない。

驚き立ち尽くす安坂の元へ。

蜘蛛が、糸を吐いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8642s/>

蜘蛛

2011年5月7日09時10分発行